

北海道をめぐって ガーデンアイランド

視点論点



有山 忠男
ガーデンアイランド北海道
2008を実現する会事務局長

すばらしい四季の北海道

北海道にもようやく春がやってきた。長い冬の間、雪の下でじっと春を待っていた植物や動物が一斉に動き出す。1年の中で、最も命の躍動を感じる季節でもある。

私は、この季節が大好きである。毎年のことだが、雪の割れ目からチューリップの芽が顔を出すのを見ると、心がわくわくする。このわくわく感は子供の時から変わらないが、歳のせいなのか、最近是一段と強くなっているような気がする。

雪が融けると、野山や公園、庭先で競うように花が咲き始める。そして爽やかな新緑が花を一層引き立てる。農村ではジャガイモの花が丘を真っ白に埋めつくす。6月、7月、北海道全域で花と緑の供宴が始まる。北海道で一番素敵で季節だ。

秋の紅葉もすばらしい。外国に行くたびに、あらためて北海道の紅葉のすばらしさを感じる。世界中さがしても、こんなに紅葉の美しい地域はないのではないか。北海道の紅葉は、これから訪れる厳しい冬への心の準備を促す儀式のようでもある。

紅葉が終わると雪が舞い、また冬がやってくる。そして、これから半年間多くの命が活動を休止する。この休眠期があるからこそ、春の命の躍動感が生まれるのだと思う。

このように北海道の四季は変化に富み、美しさと生命感がみなぎっている。こんな自然豊かな北海道に住んでいることに、大きな充足感と誇りを感じる。そして何よりもこのような環境をつくりだした自然の力に畏敬の念を抱くのである。

北海道は美しい庭園の島

“花と緑のイベントで北海道をもっと元気にしよう。”3年前、こんな思いを持った人たちが結集して、「ガーデンアイランド北海道2008」の取り組みが始まった。ガーデンアイランドとは「庭園の島」を意味する。“北海道を美しい庭園の島にしよう”というのが、この運動の最終目標である。

花と緑に関しては北海道には大きな可能性がある。この可能性を引き出すために、北海道各地で展開されている様々な花と緑の取り組みをネットワークさせて、これまでの北海道にはなかった花と緑の一大イベントを実現させようというのが、この「ガーデンアイランド北海道2008」のねらいである。

そのために、現在、全道から会場となるガーデンや景観ポイントなどを募集しており、2008年にはこの会場（約200カ所ぐらい）をネットワークして、ガーデンデザインコンクールやガーデンツアーなどのイベントを計画中である。

主人公はもちろん道民である。道民一人ひとりがこの運動を通じて、北海道における花と緑の可能性を広げていってもらいたいと願っている。

ガーデンアイランド構想

ガーデンアイランド構想というのは、当初、国土審議会の専門委員だった川勝平太氏が提唱し（氏はガーデンアイランドと称している）、1998年3月に策定された「国土のグランドデザイン」に盛り込まれた考え方である。その副題として「美しい国土の創造」がうたわれ、それまでの経済効率優先だった国土開発を大きく転換する契機となった。

川勝氏はある講演の中で、「きれいな水に恵まれたガーデンアイランドとも呼ぶべき日本の国土は、亜寒帯から亜熱帯まで広がる地球的生態系の縮図である」と述べ、「厳しく脆弱な環境で培われた国土づくりのノウハウを持つ技術者集団は世界の宮大工として、世界に貢献することが可能である」と指摘している。

私は、この構想に大きな共感を覚えるとともに、この構想こそ北海道が率先して取り組むべきテーマであると感じた。

北海道人が自然の保護や自然の活用についての高い見識と技術をもち、その技術を北海道はもとより全国、世界に発信する。その結果、北海道は花と緑の美しい島になり、多くの人たちが世界から北海道にやってくる。大自然、美しい農村景観、花と緑に飾られた北海道の町並みなどを世界から訪れた観光客が訪ね歩く。そんな光景をぜひ実現させたいものである

花と緑の効用

北海道の気候は花を育てる環境に適している。特に一日の気温差が大きいこと、夏の猛暑がないことから、花色が鮮やかで花持ちがいい。このような気候のもとで、全道各地で花のまちづくりが進められている。原生花園から庭の花まで、いろんな花が楽しめるのが北海道の魅力だ。

花や緑は人間同士をつなぐすぐれたコミュニケーションツールでもある。このツールを活用することで、地域コミュニティの活性化はもちろん、過疎化対策や子供たちの情操境域にも役立つ。また、園芸福祉という領域もある。これからの高齢化社会にとって植物の力は絶大だと思う。

近年、北海道でオープンガーデンの活動が盛んになってきている。これは、自分たちの庭を開放して庭に関心のある人に見てもらい、それを通じてお互いの交流を図ろうというものである。北海道ではブレインズというグループが全道規模でそのネットワークづくりに取り組んでいる。

ガーデンアイランドのメンバーにはもちろんこの関係者もたくさん参加している。個人の庭づくりは、これまでは多分に趣味の世界であり、一般的には、そこからまちづくりや環境への貢献という発想はあまり出てこなかった。しかし、オープンガーデンの取り組みは、このような個人の意識をもっと大きな環境づくりへの意識へと徐々に変えつつある。

2008年はガーデンアイランド年

ガーデンアイランド北海道2008は、当初はいわゆる花博を北海道で開催しようというところからスタートした。しかし、花博では、どうしても花



を作る人と見る人の立場が明確すぎて、一緒に花と緑の環境をつくっていこうという意識が希薄である。

ガーデンアイランド北海道2008は、単なる花のお祭りではなく、道民一人ひとりが参画する緑化運動と位置づけている。そのため、会場づくりに当たっては、多くの市民やボランティアも参加できる協働型の事業も企画している。

公共造園の需要が減少し、造園関係者は非常に苦しい現状にあるが、民間にはまだまだ潜在的な緑化需要はあるように思う。例えば、病院や老健施設の緑化は果たして十分なのだろうか。みすぼらしい工場などの庭を、もう少し何とかできないだろうか。コンクリートだけのコンビニの駐車場にもっと緑を入れられないものだろうか。昔からの由緒ある個人庭園も住人の高齢化とともに管理ができないところが多くなっている。そんな庭に救いの手を差し伸べることはできないだろうか、と。

仕事は小さなものであっても、それが集まると大きな需要になっていく。みんなに花や緑に関心を持ってもらうことは、身近な環境の改善に役立つばかりでなく、人々の心を豊かにする。そして、造園屋さん、花屋さん、それに関係する人たちも仕事が増える。こんな好循環が、ガーデンアイランド北海道2008を契機に、北海道各地に生まれてくることを願っている。

profile

有山 忠男 ありやま ただお

1951年小樽市生まれ。'73年北海道大学農学部農学科卒業。'73～'82年(社)日本観光協会勤務。'82年北海道にUターンし、'83年ライヴ環境計画設立・入社、'94年同社代表取締役社長就任、現在に至る。2004年よりガーデンアイランド北海道2008を実現する会事務局長。このほか国土交通省地域振興アドバイザー、わが村は美しくー北海道運動コンクール審査委員、北海道環境審議会専門委員などを務める。